

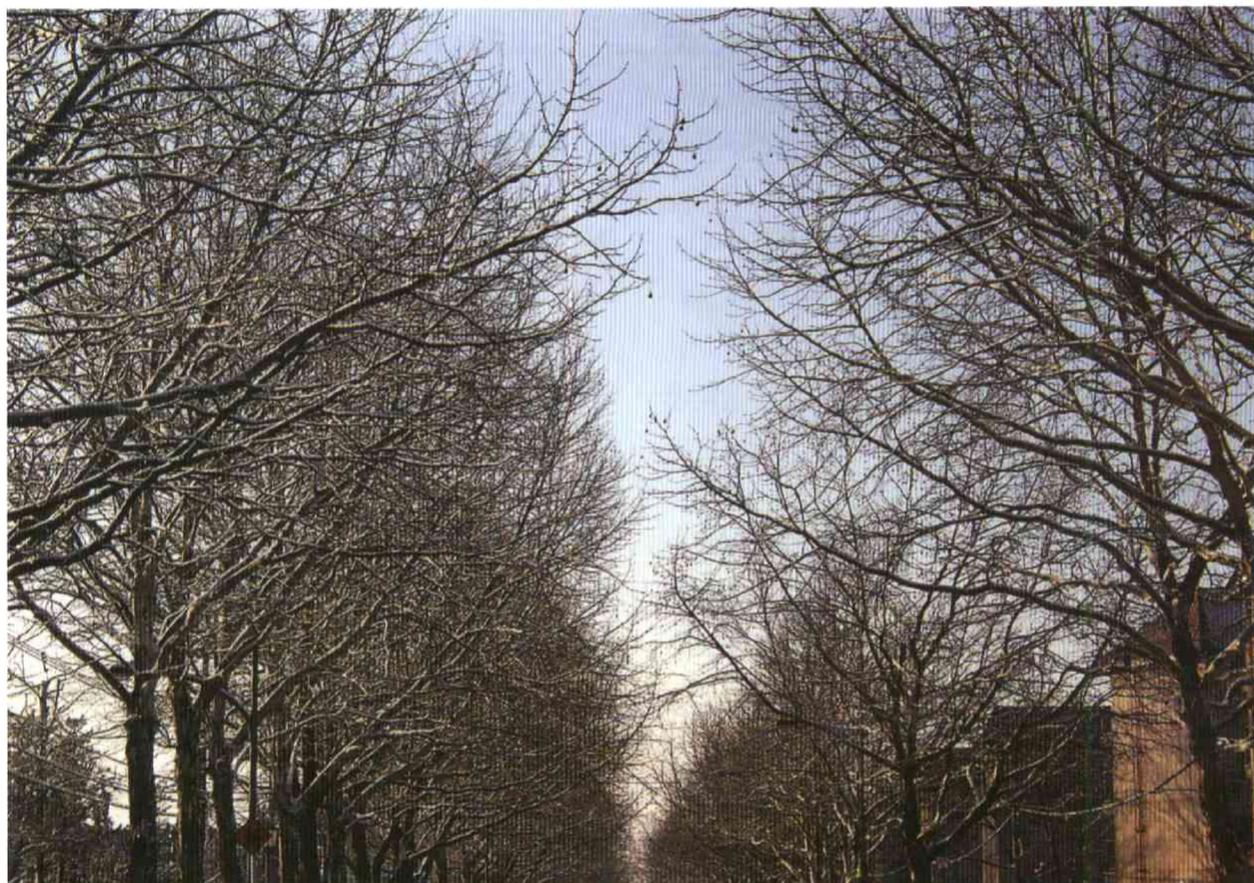
# かぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

## 第 127 号

平成19年 3月23日

編集 旭川医科大学  
発行 教務部 学生支援課



冬の街路樹 (神楽岡通り)

(写真撮影：学生支援課)

卒業生を送るにあたって……………八竹 直………… 2	就任ご挨拶……………黒田 緑…………11
医学科第29期生を送る……………羽田 勝計………… 3	退職にあたって……………谷本 光穂…………12
旅立ちに贈る「子どもが育つ魔法の言葉」と 「自己実現」……………岡田 洋子………… 4	定年退職にあたって……………菊池健次郎…………13
卒業にあたって……………遠藤 哲史………… 5	最終講義…………………………14
卒業にあたって……………高原 文治………… 5	外国人留学生冬季交流事業……………14
卒業にあたって……………林 圭………… 6	音楽系クラブコンサート 2 題……………15
医学科第29期卒業生名簿……………6	平成18年度 1年のあゆみ……………16
卒業にあたって……………津坂 仁恵………… 7	各種保険について……………18
卒業にあたって……………澤崎 勇気………… 7	平成19年度日本学生支援機構奨学生の募集について ……18
看護学科第 8 期卒業生名簿……………8	平成19年度前期分授業料免除及び延納・分納について ……18
平成18年度修士・博士学位記授与者名簿……………8	授業料未納による除籍について……………19
一年を振り返って……………黒嶋 健起………… 9	新入生歓迎合宿のご案内……………19
一年を振り返って……………小林 愛美………… 9	学生団体の「継続届」「設立届」の提出について ……20
一年を振り返って……………大塚ゆきの…………10	課外活動物品の返却について……………20
一年を振り返って……………加藤 梨紗…………10	窓外……………平 義樹…………20



## 卒業生を送るにあたって

旭川医科大学長 八 竹 直

この春めでたく医学士・看護学士の学位を取得される医学科第二十八期生九十五名、看護学科第八期生七十一名の皆さんに心からお祝い申し上げます。

皆さんはもとより、長年この春を待ち侘びて来られたご父母、ご家族も大変お喜びのことでしょう。

それはまた私ども全学の教職員にとってもこの上ない喜びで、皆様に心からのお祝いを申し上げます。

しかし学位を取得された皆さんは、世の中の多くの方々に支えられ、今日の日があるということに深く思いを致し、感謝の念を新たにさせていただきたいと思えます。

医学科では六年、看護学科では四年の間、学業や課外活動に励み、知識、技術、倫理観それに人間関係の大切さなどを十分に学ばれると共に多くの思い出も作られたことと思えます。これからは今までに得られたあらゆる事柄を活用して、社会に貢献されることを期待しています。

さて、最近様々高度先進医療が開発され、人々に大きな希望をもたらし、世の中から医療に対し大きな期待が寄せられています。

しかし他方では医師不足や看護師不足などの問題や不幸な医療事故や医療紛争等が大きな問題になっています。

医師不足や看護師不足などの問題に対して大学はなかなか良い解決策がありません。しかし今日から社会に出られるあなた方がそれぞれの考えや行動によってこれらの問題を解決してくれる可能性があり、大いに期待しています。

一方医療事故、医療紛争や医療倫理に関わる問題に対しては医療人としての基本的な職業倫理を持って臨まねばなりません。日本医師会から提唱されて

いる医療人の職業倫理指針では、まず医療人は生涯にわたり常に学習に励み、学術的知識と技術とを習得する義務が謳われています。次に医療人は、医療の向上のためには、個々の患者に対する診療のみならず、診療の基礎となる研究の向上を図ることが必要です。最後に医療人は品性の陶冶と保持に努める必要があることが強調されています。すなわち医療人は、さまざまな学識や経験を生かした多面的なものを見方ができるように見識を培い、医療人としての責任にふさわしい品性を育て上げなければなりません。

品性の陶冶と保持ということはなかなか難しいですが、常に誠実であること、他者を思いやる心と愛を持ち続けること、さらには謙虚であることの少なくとも3つの事柄を心に深く留めていただくことが肝要ではないかと思っています。

さて、この春からの現実の医療現場では色々な場面に出会い、充実感を得られることがある一方、辛いことや苦しいこと、予想もしない事態にも遭遇する可能性があると思います。そのような時にはあなた方がこの大学に入学した当時に持っていた「病んで苦しんでいる方の役に立ちたいから医療職を目指した」という初心を思い出し、誠心誠意、病んでいる人の為に医療に精進して下さることを切に願っています。

それでは学位を取得された皆さんの今後ますますのご健康とご発展を心から祈念してお祝いの言葉といたします。



## 医学科第29期生を送る

医学科第6学年担当 羽田 勝 計

この度、めでたく卒業を迎えられる医学科29期生の諸君に心からお祝い申し上げます。恐らく、大学生として過ごすことはこれが最後でしょうし、色々な思い出を胸に抱いておられることと思いますが、大多数の方にとっては、同時に「医師としてのスタートライン」に立つことになると思います。約30年前、私達は大学紛争最後の学年で、「入局拒否」、「臨床系大学院ボイコット」をクラス決議し、研修先は自分で決めることになっていました。大学病院が主体の6ヶ月単位のローテート研修ですが、今のようなマッチングはなく、人気のあるところはくじ引きとなりました。給料も安かったため、アルバイトは研修医ルームに張ってあった募集先に早い者勝ちで電話したのを覚えています。ところが翌年、1期下の卒業生が「何でもOK」のクラス決議を行ったため、私達の先輩が10年かけて立ち上げたシステムはその時点で崩壊しました。そして今、諸君はマッチング第4期生として巣立つことになります。大きな違いはシステムを自分達で決めたのではない、ということですが、選択の範囲が広がったという意味では良いことかもしれません。

さて、今後諸君がどのような道を歩むかわかりませんが、大切なことがいくつかあります。私が最も大切だと思うのは「情熱」です。臨床においても、研究においても、「情熱」が欠けるとルーチン・ワークに流され、いたずらに時間だけが過ぎていきます。今の「初期研修システム」で研修医には労働基準法が適応され、病院側が週40時間以上勤務させてはいけないことになっています。本来アメリカのシステムを導入したはずなのですが、あちらは「週80時間以上勤務させてはいけない」ことになっています。何も長時間働くことに意義があるわけではありませんが、何事も達成するには時間がかかります。どの領域でも、本当に自分がやりたいことを達成するのに必要なことは、「情熱」×「時間」だと私は考えています。

次に大切なことは「師を選ぶ」ことです。今回大部分の諸君は、マッチングに当たって、表面的に示された各病院の研修プログラムから選択したのだと思います。しかしこれは決して諸君の医師としての将来を保障するものではありません。大切なことは「情熱」を持ち続けて研修することと、将来の「師を選ぶ」ことだと思います。師弟関係というのは、最近日本では批判の対象となりがちですが、どの職業でも極めて大切だと思います。出身大学を余り問題にしないアメリカですら、どこのラボの出身で、ボスは誰か、ということは問題になります。そして、「師」は身近にいます。旭川医科大学にも、「師」として選んで間違いのない先生方が多数おられます。決して教授だけが「師」であるわけではありません。今後諸君は「自分がやりたいこと探し」をすることになると思いますが、残念ながら自分の適性を自分で正確に評価する訓練を日本人はあまり受けていません。ただ、どの分野を選んでも、続けるとそれなりに満足するものです。しかし、「師匠選び」は違います。同じ分野を選んでも、「師」が違えばその後の成長過程が異なることが良くあります。ただし、あくまで人間関係なので全ての人にとって良い「師」は存在しません。是非、自分にとって良いと思われる「師」を選び、自分の能力を高めて下さい。

さて、最後に申し上げたいのは、「仲間を大切に」、ということです。医療は一人ではできません。仲間のメンバーがやりたがらない、いわゆる雑用を、進んでやること（俗に「雑巾がけ」と呼ばれています）、何でも良いから自分の得意技を持つことは、どの世界でも重要です。そうすれば、仲間は何かの際に必ず助けてくれます。臨床でも、研究でも、皆がスターになれるわけではありません。しかし、一流の臨床医、一流の研究者には誰でもなれる可能性があります。今、諸君はそのスタートラインに立っています。頑張ってください。

(内科学講座 教授)



## 旅立ちに贈る「子どもが育つ 魔法の言葉」と「自己実現」

看護学科第4学年担当 岡田 洋子

ご卒業おめでとうございます。

夏休み明けから、ピンチヒッターとして皆さん方のクラス担任であった岡田です。4年生はすでに長期臨地実習・卒業研究・就職活動に入っており、クラス全体としてお会いする機会は、ほとんど無かったように思います。就職・進学のための相談あるいは推薦書を依頼にこられた方、アルバム委員の方、そして謝恩会にむけて幹事をなさっている方・・・等、訪室を受けてからの対応で、担任としては十分機能できなかったこと、紙面を借りてお詫びいたします。

進学される一部の方を除いて、多くの皆さんは4月から社会人としてスタートされます。皆さん方を迎え入れる、皆さん方がこれから歩む看護界はどのような社会なのでしょう。人間は、自分自身あるいは家族・大切な人の幸せと健康を願い、豊かな生活を求めて生きてきた（生きている）と思います。確かに生活は便利になり、欲しい物が容易に手に入る豊かな社会となりました。そしてこの豊かさに比例するかのようになり、いじめ、ハラスメント、凶悪犯罪の低年齢化、少子高齢化、自然環境破壊・温暖化現象等々、親子間を含めた人間間・人間と社会間・人間と自然環境間の問題が顕在化してきています。特に医療や教育の場においてあってはならない人間の尊厳や人格を深く傷つける「ハラスメント」が、身近でも見聞きするようになりました。悲しいことです。

子どもは、私達大人（社会）を写した鏡です。自ら3人の子どもを育てた母親であり、孫・ひ孫もいる家庭教育コンサルタントのドロシー・ロー・ノルトは、著書「子どもが育つ魔法の言葉」（PHP研究所）の中で次のように述べています。

- ・けなされて育つと、子どもは、人をけなすようになる
- ・子どもをばかにすると、引っ込みじあんな子になる
- ・とげとげした家庭で育つと、子どもは、乱暴になる
- ・守ってあげれば、子どもは強い子に育つ
- ・褒めてあげれば、子どもは、明るい子に育つ
- ・励ましてあげれば、子どもは、自信を持つようになる
- ・分かち合うことを教えれば、子どもは、思いやりを学ぶ
- ・子どもに公平であれば、子どもは、正義感のある子に育つ
- ・親が正直であれば、子どもは、正直であることの大切さを知る

本来家族そして社会が有し受け継がれてきた機能・・・「守ってあげること」「励ますこと」「分かち合うこと」「公平であること」「正直であること」といった、人間にとって基本的な絆・家族機能を、現代社会は豊かさの代償として失ないつつあるように思います。

このような社会に巣立っていく皆さん方には「良

き家庭人として」「良き社会人として」幸せな人生であってほしいと願っています。そしてその幸せの輪が周囲の人々や次世代へと広がっていくことを。何が幸せであるかは人によってそれぞれ異なりますが、真に自分を幸せに感じ感謝して生きる人は他者の幸せをも大切にでき、人間の尊厳や人格を深く傷つけるような言動をとることはできないと、私は信じています。

医療の世界では長く、医師がそのリーダーとしての任を果たしてきました。現代では、医療に関わる職種も増えその専門性も深まっています。コ・メディカルが一つのチームとなって患者中心に支援を提供していかなければ、良質で十分な医療を提供することが困難となっています。他職種と協働して仕事をしていくことが必然となってきています。

私が以前から「座右の書」として愛読している本の著者であるマズローは、著書「人間性の最高価値」（誠心書房）の中で「自己実現」する人の行動を次のように述べています。

- 1) 自己に捕らわれず、無我夢中になる。
- 2) 不安や恐怖のために自己防衛陥らず、成長への選択を行なう。
- 3) 表面を装わず、真実の自己に誠実に応える。
- 4) 自分自身に正直となり、その自分に責任をとる。
- 5) 自分自身に耳を傾け、他人とは異なる自分に正直であろうとする勇気がある。
- 6) 知性を用いて、自分がしたいと思うことをよりよく成し遂げようと努力する
- 7) 買い求めたり、他人からもらったり、探し求めたりして得ることのできない真・善・美の至高体験をする。
- 8) 自分が何物であり、誰であるかを発見し、自分がどこへ行き、使命が何であるかを見出す。

反対に自己実現していない人は、自分の先入観や価値観に捕らわれる。自分の考え方（価値観）が脅かされると自己防衛に必死となり、先入観や価値観に振り回される。自己実現する人は、「自分が何物であり、誰であるかを見出し、自分がどこへ行き、使命が何であるかを見出す」とあります。自分の専門とする領域を極める努力・取り組みと同時に、専門外の領域に関してはその専門領域の考えや方針を尊重するといった、人間として・職業人として基本的なマナー・ルールを持ち備えた人間性が求められます。このことなくしては、どのような対策を講じたとしても「いじめ」や人間の尊厳・人格を深く傷つける「ハラスメント」は、無くならないと思います。

これから他職種の方々と協働して仕事をしていく機会が多い皆さん方には、自分の専門とする領域への責任・責務と同時に、他職種が専門とする領域への敬意・尊重といった行動がとれる人間であってほしいと心から願い、期待しています。

2007年3月吉日

(看護学講座 教授)

## 卒業にあたって

医学科第29期卒業生 遠藤 哲史



当事者になってみないとわからないことってありますよね。毎年卒業シーズンがやってくると、今までお世話になった先輩方を毎年同じように、普通に送り出してきた。いつか自分も卒業する日がくるんだろうな、くらいにしか思っていなかった。そして、今回自分が送り出される身となった。今改めて感じることは、今までそれが当たり前で、何とも思わなかったことが、実はすごく貴重なこと（時間）であったということだ。毎日授業や実習があって学校や病院へ行き、そこで仲間や先生と会うことが当然のことであった。そして、また明日行けば普通に顔を合わせることができた。それが当たり前であったから、何も意識せずに日々過ごしてきた。

国家試験最終日、長い受験勉強が終わり開放感で

いっぱいだったが、同時に何故か寂しさも込み上げてきた。もしかしたら、もう会うことのない人もいるのではないだろうか（卒業式も事情により出席できない人もいたりするから）。そう思うと様々な思いが込み上げてきた。あの時あんなにお世話になったのに、お礼さえ言えなかった。あの時あんな言い方してしまったけど、もう少し別の言い方をしてあげれば良かった。あの人のことをもっともっと知りたかったのに、大したことも話せなかった…、等々。

その時その時何気なく過ごしていることって、実はすごく貴重な時間なんだなあ。きっとこれからも色々な人と出会い、同じように後になって、もっとこうしておけば良かった、なんて思うことも多々あると思う。それはそれで良いのだと思う。ただ、その時は二度とない時だから、その時その瞬間を大切にしていけたら良いと思う。これから医師として働いたら、人との出会いは今まで以上に多くなり、同時に短く貴重なものとなるだろうから。

最後に、今までお世話になった人達へ。この場をお借りしてお礼を言いたいと思う。

「どうもありがとう」 いつかまた会える日を夢見て。

## 卒業にあたって

医学科第29期卒業生 高原文治



入学してから短かったのでしょうか？長かったのでしょうか？

二月中旬に国家試験を終えた時には、6年間とは意外にも短いものだと感じました。しかし、それもつかの間、6年間生活した部屋の汚れはやはり6年間分で、掃除

をしながら、その長さを実感しています。

さて、簡単に書けば、爆烈な積雪を6回経験して身も心も大きく（特に身は3割増！）になりました。

この6年間は、それまでのストレス・フリーな、ぬるい生活から一変し、ラグビー部の朝練・そしてみっちり学業という大学生的な生活を送るというものでした。ここで、物事を乗り越えていく上での気合いの重要性を悟ったのが一番の収穫であったように思います。

もちろん、ぬるい自分が大した気合いなど持ち合

わせている訳ありません。周りの同級生、特にラグビー部の仲間の気合いをお裾分けしてもらえたおかげです。

きつくても、同じ仲間も同じようにきついんだろうなという気持ちと、自分がやらねばという気持ちで勉強も部活も何とかへこたれずに卒業まで付いてくることが出来ました。

みんな、ありがとう。そして今後もよろしく。

卒業式や国家試験は一つの区切りではあります。

しかし、また同時に人生における一つの通過点に過ぎません。6年間の旭川での生活がそうであった様に、この先もその時その時に会う人々に助けられ支えられながら、紆余曲折して行くのでしょう。

今までお世話になった方々に感謝しつつ、旭川医科大学で得た体験をもとに、自分自身も他人に影響を与えられる様な生き方が出来たら良いのになと思います。

## 卒業にあたって

医学科第29期卒業生 林 圭



長かったようで短かった6年間の大学生活が終了となりました。これまでの期間お世話になった先生方、友人、家族、実習での短い期間ながら関わった患者様方等、多くの方々への感謝の気持ちでいっぱいです。

自分は部活をやるわけでもなく、あまり行事には積極的に参加はしなかった方かもしれません。それでも多くの同じ道を目指す仲間たちと、自分たちを導いてくださる多くの方々を支えられて、ここまで成長して来られたという気持ちに変わりはありません。この気持ちは今後の生活の中でも一生忘れられないものだと思います。

6年間の勉強の中、通るだけに精一杯だった試験を終え、終わりのない医師としての生涯学習に向かうこととなります。病院実習の短い期間でも、医療

現場で働いている人たちの実際と、様々な病気に悩まされている多くの患者様方に触れる中で、学ぶことの多さと大きな責任感が必要であることを実感し、自分でやっていけるのかどうかという不安は卒業を間近に控えた現在でも消えることはありません。しかし、その不安を持ちながらも、一步一步ゆっくりと成長していくことが出来れば、それが自分にとっての理想の医師へと近づいていくことだと信じ、卒業後も自分なりの歩みを続けていこうと思っています。

また、自分は旭川で長い期間を過ごし、大学を選択する際も自然に旭川医大を選択しました。現在北海道の病院が医師の人数不足に悩まされていて、多くの将来に対する不安の声が挙がっています。自分が卒業後も北海道で働いて行くことが、結果的に多くの人たちの救いになることに強い責任を感じるとともに、充実感を覚えもします。6年間の大学生活の中で旭川、もしくは北海道という環境の中で今後も勉強を続けていきたいと思う人が増えていくことを道民の一人として願うと共に、今後の医療現場の環境が改善されていくことを期待しています。その未来に自分が少しでも関わって行ければ幸いです。

## 卒業にあたって

看護学科第8期卒業生 津坂 仁恵



これを書いている今から4年前のこの時期。今と同じように期待と不安でいっぱいだったのを思い出す。そんな期待は呆気なく裏切られたし、それ以上のものでもあった。大学に入りたての私たちを迎えてくれた先輩方は、特にユニフォーム姿が

とても凛々しく見えた。

しかし、いざ自分たちが4年目の長い実習に入ると、日々を乗り越えることで精一杯だった。患者様の一挙一動に一喜一憂。病棟スタッフや先生、さらには患者様にも質問されて、しどろもどろのパニック状態。ああ、先輩たちのような姿とは程遠い……。休憩時間に入ると、度々そう思った。そうして数々の実習を終えた今、その4年間を振り返って、何よりも自分の力となったのは、『根拠を持って行動すること』だと思う。『なんとなく』してきたことも、

実習を重ねるごとに、『こうだから、こうする。』と考えることが自然になった。(しかし、ユニフォームを着ている時に限る。)これはもう、大学4年間の訓練の賜物だと言える。

そんな必死だった実習中は特に、親から離れて一人暮らしになって貴重だったのは、家族のような友人たちだった。支えあって、泣いたり笑ったり、成功を称えあったり。授業や実習が終わった夜、みんなで食べる食事は本当に美味しい。お酒があってもなくても、よく喋り、よく笑った。振り返ると、なんだかすごくかけがえのない時間を感じる。私の大学生活はそんなことばかりが、大きな位置を占めている。

卒業を目前に、寂しさと不安と期待が混ざって複雑な気持ちではあるが、これまでに学んできたたくさんの方のことを総動員して、次の目標に向かっていきたいと思う。そして、実習中に会った様々な人たちの期待に応えられるようにしたい。

4年間ご指導頂いた先生方をはじめ、実習でお世話になった多くの方々に感謝しています。また、ここまで支えてくれた親にも多大なる感謝を込めて、本当にありがとうございました。

## 卒業にあたって

看護学科第8期卒業生 澤崎 勇氣



4年前の春、入学式も終え不安と緊張の入り混じる中、大学の校門をくぐり「ついに大学生になった」という喜びの気持ちと「早く大学生活に馴染もう」という焦りにも似た気持ちを抱え、大学生活をスタートしたことを今も覚えています。今卒業

を目前に控え大学4年間を振り返り、あっという間だったという印象は決して拭い去ることはできませんが、4年間における思い出の一つひとつを思うと大変有意義でもあり、中身の濃い4年間を送ることができたと思います。

大学生活を通して何より学んだのは「考える」ということであつたように思います。大学入学以前までのように単純に与えられた知識を覚えるだけでなく、自らの興味・関心に基づいて発展的に学習することが大学では求められ、特に実習などでは決し

てマニュアル通りにいかない生身の患者様を対象にし、一つひとつの情報を収集しては個別的な看護計画を考察することが求められるため、その「考える」ということの難しさ・奥深さを感じることも多々あったように思います。しかし、一方では理論的に考えるということが少しずつできるようになっていく自分を、社会人そして看護職への一歩を踏み出しているのだと客観的に振り返ることもあり、そんな自らの成長を誇らしく思うようになりました。

そして何より人との出会いが私の大学生活を豊かにし、私自身を大きく成長させたと思います。4年間は決して平坦な道のりばかりではなく、挫折することもありましたが、そんなときには優しい手を差し伸べてくれた友人、熱心に御指導して下さった先生方や実習でお世話になった病棟・地域の看護職の方々がありました。また、看護学生として未熟ながらそんな自分を受け入れて下さった患者様やその家族の方々、いつもふざけあっていた同期の男子看護学生、そして陰ながら大学生活を送ることを支えてくれた家族など多くの方々に感謝いたします。本当にありがとうございました。

平成18年度 課程博士学位記授与者名簿

氏 名	授与年月日
大 隅 大 介	平成18年6月30日
小 関 隆	平成18年6月30日
北 原 克 教	平成18年6月30日
稲 場 勇 平	平成18年9月29日
村 山 賢 起	平成19年3月23日
柏 手 由 里 乃	平成19年3月23日
張 成 宰	平成19年3月23日
Marcello Otake Sato	平成19年3月23日
宮 内 和 誠	平成19年3月23日
中 野 靖 弘	平成19年3月23日
野 村 由 香	平成19年3月23日
菊 池 良 子	平成19年3月23日

平成18年度 論文博士学位記授与者名簿

氏 名	授与年月日
長 島 君 元	平成18年6月30日
佐 藤 恒	平成18年6月30日
後 藤 学	平成18年9月29日
高 橋 淳 一	平成18年9月29日
吉 田 雅 紀	平成18年9月29日
山 本 憲 志	平成19年3月23日
Toni Wandra	平成19年3月23日
田 村 義 之	平成19年3月23日

平成18年度 修士学位記授与者名簿

氏 名	授与年月日
荒 井 優 気	平成19年3月23日
蝦 名 智 子	平成19年3月23日
角 谷 里 佳	平成19年3月23日
川 筋 奈 緒 美	平成19年3月23日
佐 々 木 洋 子	平成19年3月23日
臺 野 美 奈 子	平成19年3月23日
伊 藤 亜 希 子	平成19年3月23日
中 谷 理 恵	平成19年3月23日

## 一年を振り返って

医学科第1学年 黒嶋健起



パソコンのモニター越しに、4桁の数字を見た。

自分の何かを認められた気がしたあの瞬間から、早いもので1年という月日が流れようとしています。

引越しの準備に追われ、札幌～旭川を何度も往復しました。何よりも驚いたのは、同じ北海道内にもかかわらず、ここまで寒いのかということでした。道産子の私ですら突き刺さるような寒さを感じたものです。

何もかもが初めての一人暮らしに始まり、入学式、新歓合宿と慌しく過ぎていきました。先輩方がすすんで話しかけてくれ、人と人のつながりの大切さをあらためて感じた、そんな時期だったと思います。そんな中、私も2つの部活動に入ることを決め、やっと医大の生徒の仲間入りをしたような気になったのを覚えています。

6月に入り医大祭というイベントもあり、なおの

こと忙しい日常を過ごし、あっという間に7月に入って、医大での初めてともいえるテストがありました。浪人というプレッシャーとは違った、留年というプレッシャーを意識したのもきっとこの頃です。

異様に短い夏休みを終え、体調を崩してしまった私でしたが、たくさんの友人の助けに支えられ、なんとか無事に前期試験を終えることが出来ました。ややほっとしたのも束の間で、後期に入ると実習の数が格段に増え、レポートやスケッチに追われる毎日。正直、この頃が1番しんどかったと思います。まさか大学生になって色鉛筆を持つとも思っていませんでした。教室で組織の絵を描いている人が多く、ある意味異様な光景でした。

夏休みよりさらに短い冬休みが過ぎると、あっという間に後期試験。後期試験も先輩方の助言により無事に追え、この文を書いている自分に到っています。

こうして1年を振り返ると、出会った人々や両親に支えられている自分を再認識し、感謝の気持ちでいっぱいです。もうすぐ新入生がやってきます。自分がこの1年で得たもののいくらかでも、伝えてあげたいと感じています。

## 一年を振り返って

医学科第1学年 小林愛美



白一面の景色も少しずつ色づき、春の暖かさが感じられる季節となりました。

旭川医科大学に入学してから、早一年が過ぎようとしています。

私は実家を離れ、一人暮らしをするのは初めてでした。

期待や不安が入り混じった気持ちで入学式を向かえ、先輩方の部活勧誘を受けながら大学生活がスタートしました。新しい環境に慣れるまでは戸惑いや不安を抱えていましたが、よい友人に恵まれ充実した生活を送っています。

始めの頃に遊んでいた友人と今でも一緒にいます。

部活では、先輩から多く学ぶところがありました。私はどの部活に入部するか最後まで悩みました。6年間続けたいという思いがあったからです。その時の選択は正解であったと思います。

単なる技術だけではなく、厳しさと優しさをもって接する姿勢や、成し遂げようと努力する姿勢など、態度でも教えていただいた気がします。

部活動以外の時間には、ご飯や遊びに連れて行ってくれました。

短い期間で多くの人と接し、一つ一つの事が良い経験となりました。

大学には全国各地から集まる、年齢も育ってきた環境も違う人達との出会いが多くありました。

価値観の違いもありますが、考え方が違うからこそ得られるものもあります。

話していく中で、自分になかった視点や考え方に気づき、いい影響を受けました。

広く多角面から考えられる視野を持てるよう精進したいと思います。

私は自分に足りないと思うところも多く、まだまだ社会に出る前に養わなければならないところがあります。大学にはその為の環境が用意されていると思います。

講義や自学を通して必要とされる知識を増やすことができ、様々な分野を専門としておられる先生方も丁寧に質問に対応してくれました。

今後もこの大学で様々な出会いがあると思います。

知識だけではなく自己の内面を成長できるよう、これからの日々を大切に過ごしたいと思います。

## 一年を振り返って



看護学科第1年 大塚 ゆきの

2005年7月下旬、「旭医にはAO入試の制度があるから考えてごらん」という高校の担任の先生が言った一言のおかげで、2006年4月、晴れて私はこの大学の一員となることができました。

しかし、これまであまり顔ぶれの変わらない中で生活してきた私にとって、大学生活は期待よりも不安が多くを占めていました。親元を離れての一人暮らしもその不安を大きくする要因だったのかもしれませんが。幼いころからの憧れだった医療の世界・看護の道に進めて、専門的な勉強ができることは非常に嬉しかったけれど、新しい生活にはなかなか馴染むことができませんでした。このような調子でこの先、やっていけるだろうかという迷いがいつもあった気がします。しかし、そんな迷いはどこへやら、

今はとても楽しく生活しています。テスト、レポート、その他もろもろ・・・と忙しい毎日ですが、支え合える仲間もでき、非常に充実しています。また、病院実習や生体観察実習などを通して、自分がどんどん医療の世界に近づいているという実感が湧いてきています。

この1年間で痛切に感じたことが2つあります。1つは、一人暮らしを始めると勉強しなくても掃除しなくても、もう誰も注意してくれないということです。そのときは注意されなくて楽だと思っても、結局最後に困ったり、嫌な気分になったりするの自分です。一人暮らしには自立と自律が本当に重要だと思います。2つ目は、人とよい関係を築いていくには自分に自信が必要だということです。自信を持っていられるような生活をしていないと、人の優しさを素直に受け止めることすらできないのだということに気付きました。

私はもう迷いません。残りの3年間、よい看護師になるべく、日々の小さなことに対しても努力を惜しまず、最後には大きな結果を得られるようがんばりたいです。

## 一年を振り返って



看護学科第1学年 加藤 梨紗

旭川医科大学に入学して早いものでもう一年が過ぎようとしています。この一年は、自分にとって新しい発見もあり、色々な意味で自分を成長させてくれるような充実した楽しい一年だったと思います。

昨年春、奇跡的に合格しとても嬉しかった反面、新しい環境に不安と戸惑いがあったことをまだ覚えています。しかし、部活の先輩方が大学生活について色々話してくれたり、友達もたくさんでき、楽しい大学生活を送れるという期待がもてました。

勉強に関しては、今までとは全く違う学び方だと思いました。基礎看護技術学においては、確かな看護技術を身につけるために友人と一緒に技術を練習したり、お互いもっと上手くなれるように助言し合ったり、個人的に先生からご指導をいただいたりと

自分から積極的に学ぶ姿勢が何よりも大切であることに気づきました。また、議論し合う場面も多々あり、これまで発言することが苦手だった私にとっては自分を成長させるよい機会となったと思います。

後期では実習が多々あり、中でも衝撃的であったのは、ハムスターの解剖と人体解剖の見学です。今まで解剖をしたことがないのにいきなり自分で行うにはやはり抵抗がありましたが、哺乳類の体の中がどのような構造になっているのかを観察でき、とても勉強になったと思います。また、人体解剖では医学科二年生の先輩方がわかりやすく説明してくれたり、近くで観察することによって教科書では学べない多くのことを学ばせていただきました。また、病院実習では、実際に患者さんとふれ合ったり、看護の現場を見学させていただいたことで、この一年で学んだ看護学をより深く学べ、今後の勉強に生かすことができる充実した実習であったと思います。

残りの三年間もこの一年みたいにあっという間に過ぎていくのだと思います。その中で私は部活も大いに楽しみ、積極的に勉強にも励めるような今しか過ごせない充実した大学生活を送って生きたいと思っています。



## 「就任ご挨拶」

看護学講座（母性看護学・助産学）教授 黒田 緑

平成18年12月1日付けで母性看護学・助産学教授を拝命致しました。定年退職された野村教授とはバトタッチが出来ませんでした。母性看護学・助産学領域の充実と社会の変遷に即した働きが出来ますよう微力ではありますが努力する所存であります。

私は助産師免許取得後、現日赤医療センター分娩室、北里大学病院産科病棟で助産師として多くの出産を取り扱って参りました。日赤医療センターでは自然出産を、北里大学病院産科病棟では少数のスタッフで大学病院としては最も多いと思われる年間1500～1600件の分娩への対応と管理妊産婦への看護援助を実践して参りました。北里大学病院での出産様式は全例誘発麻酔分娩であり、当時の産科麻酔の方法としてはカクテル麻酔といわれた全身麻酔による出産でした。自然出産においても経過の早い経産婦の分娩はより速やかに経過し、同時進行の複数の産婦の緻密な分娩経過の診断と実践を求められる経験をしました。また、様々な症例に対するケア実践の場でもありました。自然出産を標榜する方々からは誘発麻酔分娩に対する批判があります。しかし、私は自然および管理出産双方の経験をふまえ、両方の良さについて認識でき、誘発麻酔分娩を含めた管理出産は医療適応例はもとより、十分なインフォームドコンセントを前提にした選択肢の1つとして、現代の出産のあり方であると考えています。臨床での経験は、多くの女性が当面する仕事か育児かの選択の結果途切れ、一地域人として貴重な経験をした後に今日に続く教育に関わるようになりました。

4年制大学の中で看護基礎教育と並行して行われる助産師教育に携わり、助産師教育は、自立した専門職の育成としてどのような教育が望ましいのかを常に考えて参りました。

折しも、看護教育は高等教育化に向けて始動を始めた時期であり、当初から助産師教育の位置付けについて異なる意見がありました。戦後、日本の看護教育は米国の影響を受け保健師・助産師・看護師の一体化を念頭に構築された教育であり、教育内容および教育期間等において助産師の専門性が必ずしも強調された状況ではありません。現在、助産師教育は専門学校・短期大学専攻科・4年制大学・大学専攻科・大学院修士課程・専門職大学院と同一の国家試験受験資格を得るために6通りの教育が展開されています。殊に最近の10年余の間に全国百数十校に増加した看護系大学の中で行われている助産師教育は看護基礎教育と並行する形態をとり、さらに、保健師・助産師・看護師の三国家試験受験資格を124単位余の大学教育の中で取得できる、他医療職の教育には見られない教育が行われています。このような中にあり、混沌とした助産師教育の今後を考える上で社会と教育の成り立ちを明らかにすることを研究し、また、助産師教育の実態を調査・分析・問題点の明確化を行い教育推進活動の根拠として参りました。さらに、実践教育としての教育内容指針を調査・分析の結果をふまえて明らかにし、専門教育の質の確保に務めています。

臨床におきましては、出産に伴う産婦の不安、母子相互作用、先天異常児のサポート、出生前診断を受ける女性の自己決定等に関することを研究し、教育では上記のほかに看護職者の生涯学習ニーズに関する研究などがあります。

助産師教育のみならず、看護基礎教育の重要性をも認識しております。先の哲学者の「教育学は産婆学である」との言葉は私の教育に対する考え方を表しており、日々実践に務めているところです。



## 退職にあたって

物理学教授 谷本光穂

私は、昭和60年8月16日に旭川医科大学に赴任し、今日まで約21年6ヶ月、長いようであり、また、無我夢中の短いようでもありましたが、大変お世話になりました。

赴任当時、「物理」のほかに「情報処理」を担当していました。着任当時はパソコンの台数が少なく確か数台だと思いますが、実習にはならない状態でした。それでも年に1、2台と少しずつ買い増してきましたが、とても間に合わず、この窮状を心配された我孫子副学長や清水学長の裁断のもと一気に60台が揃い、第7講義室の裏のスペース（現在は医学科低学年男子の更衣室）を情報処理実習室として整備してもらい、やっと実習らしき教育が出来るようになりました。パソコンはPC-9800UVで、プログラミング言語は、BASICからFORTRANに変更しました。教育内容は、プログラム作成が主目的で万年カレンダーを作ったり、道路表面から上空に向かって空気の屈折率が変わることを条件に逃げ水を再現させたり、保健管理センターよりもらった本学学生の身長、体重のデータを用いて肥満度を表すBMI指標を求め、その統計処理を行ったり結構楽しい授業でした。学生もこの授業に結構のめりこみ、毎年のように2～3名の学生は熱心さのあまり留年するのではないかと気を揉んだものです。物理実習でも非常に積極的な学生がいて、自分としては結果が納得出来ないので再実験をさせてほしいと申し出て水曜日の午後に再実験をさせた事もありました。

それに比べて最近の学生は、どうも授業の受講態度が非常に受身になっているように思えてなりません。「省エネ」と言う言葉が流行っていますが、最小の努力で何とか進級しようとする、いわゆる「低空飛行」でも構わないと思っている学生が増えたように思えます。最近の学生アンケート結果を読むと、出席カードをなくしてほしい、テスト日程を生徒に決めさせてほしい、1学年の基礎科目で落とすのはよしの方が良い等々自分勝手な主張をする学生、ほんの一部の学生だとは思いますが、には呆れてしま

います。もっと若者らしく自由闊達で建設的な意見を述べてもらいたかったと思います。

私が赴任してから入試もいろいろ変わりました。A日程から、B日程に、更に分離分各方式へと変わり、推薦入試の導入、AO入試の導入、推薦入試の廃止等目まぐるしく変遷してきました。更に、近い将来には分離分割から一本化、更に、特別推薦枠として「地域枠」が導入されます。果たしてどれだけの本学のアドミッションポリシーに見合った優秀な学生を入学させることが出来るのだろうかと思ってしまう。また、最終講義でも一部触れましたが、3年前の平成15年度より高校の新学習指導要領で教育を受けてきた高校生が育ってきています。今年の1年生がその1期生として入学してきました。この指導要領は「ゆとり教育」を目指し、学習内容が従来よりも3割削減されています。このような状況なので一般教育の先生方をはじめ初学年を担当される先生方のご苦労は今後益々大変になるのではないのでしょうか。

卒後臨床研修マッチングに関しては、旭川医科大学への定着率がついに10%台に落ちてしまったことが真に残念でなりません。最近配られた「医師臨床研修のアンケート結果」を拝見しました、若者の都会志向、地元志向である程度やむをえない面もあると思いますが、大学側の努力が空回りしているように思えてなりません。

この原稿を書き終えたら早速メールにて学生支援課へ送信する予定ですが、このように電子メールが生活の一部になっていることに改めて感じ入りました。学内LAN管理運営委員会の副委員長として平成7年に開設にこぎつけたことも今となっては懐かしい思い出であります。

最後になりましたが、教職員の皆様のご健勝とご活躍を、そして、旭川医科大学の益々の発展をご祈念申し上げて筆をおかせていただきます。21年余にわたり教育、研究に大変お世話になりました。心より厚く御礼申し上げます。



## 定年退職にあたって

内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野教授 菊池 健次郎

平成19年3月31日付で定年退職を迎えることになりました。平成4年8月16日付で本学内科学第一講座・第一内科（現在の内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野、病院では循環器内科・腎臓内科・呼吸器内科・神経内科）の第2代目の担当者（初代故小野寺壮吉教授の後任）として赴任致しました。平成4年9月30日および同年12月1日発行の「旭川医大病院ニュース（第42号）」、「かぐらおか（第74号）」では、それぞれ「就任にあたって」、「教授就任にあたって」と題して冠循環（循環器内科）・肺循環（呼吸器内科）・脳循環（神経内科）に腎循環（腎臓内科）を加え融和させ、第一内科を総合力にあふれる循環器（総合）内科に発展させたいとの抱負を述べております。また、同年12月発行の第一内科同門会誌に“旭川医大には、教室や同門の先生方は勿論のこと、講義や臨床実習で接する学生諸君の姿勢・雰囲気、建学の精神と申しますか、バイタリティーとハングリー精神、真摯さ、真面目さがまだ息づいており、これらは最近では、なかなか得がたい大きな魅力で今後の本学の発展への原動力になる…。そういう若い人の力・魅力を是非大きく育てたい。”と記しております。一方、将来、全人的医療を担う人間性豊かな医師を目指す学生諸君としては、挨拶含めた礼儀作法に欠けるところも感じ、これは愛情のこもった厳しさで接することに致しました。以来、14年7ヶ月間にわたりこれらの抱負を達成すべく努力してまいりました。そして退職を前にし、この14年余を振り返りますと、教室については、教育・研究・診療・管理運営・社会貢献など求められる業務に比し数少ないスタッフの中で、広い領域をカバーする有能な教室員がよくここまで育てくれたなど、ほっと安堵する気持ちとともに教室員および同門の先生方の真摯な努力と一致した協力に衷心より感謝を致したいと思います。今後の彼らの大きな飛躍と教室の、ひいては大学全体の更なる発展を大いに期待致しております。また、卒後臨床研修制

度導入後の若い医師の人材確保に向けては、内科学講座では現在、内科3科、総合診療部が一体となり本学の卒後研修カリキュラムの充実・柔軟化、情報収集・情報発信の強化を進めており、明るい展望が切り開かれるものと信じております。学生諸君との関連では、平成6年8月から平成10年3月まで保健管理センター所長を命ぜられ、その際に臨床各科のご理解とご協力を頂き、健康相談日を現在の日数に増加、また、当時の清水学長先生や学生課（現在の学生支援課）の支援を頂き、新入生への心電図検査、末梢血算、血液生化学検査などを導入することができました。加えて、「AIDSと共に生きる時代の中にあって」の講演会の開催とその内容「保健管理センターのしおり」への掲載と学生諸君への配布を行いました。これらは本学が全人的医療を担うべき医師および看護スタッフの育成のためには学生時代の心身の健康保持・増進は極めて重要と考えたらかに他なりません。サッカー部の顧問も忘れられない経験でした。そして学生諸君の前述した“得がたい魅力”は、まだ残っているようで嬉しく思っています。病院のほうでは、平成15年8月から平成17年7月まで副病院長（経営改善・病院改革担当）、地域医療連携室長、ボランティア委員会委員長を仰せつかりました。この間、第一内科の教室員、教室のサポーターの皆さんはもとより病院各部門の皆さん、ボランティアの方々には多大なご協力と御支援を頂きました。特に感慨深い思い出に病院機能評価受審があげられます。実質3.5ヶ月の超短期間の準備で認定証を授与されたことは病院職員はもとより大学の全職員の危機時の結束力の高さの賜物と感激致しました。14年余にわたる皆様の御厚情に心より感謝と御礼を申し上げ、また、学生諸君が真摯で表面的な情報に惑わされず、常に本質を見直す姿勢を堅持されんこと、本学の益々の発展を祈念し、退職の御挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

## 最終講義が行われました

平成19年2月8日(木)に、3月31日をもって定年退職されます、物理学 教授 谷本光穂先生並びに内科学講座 循環・呼吸・神経病態内科学分野 教授 菊池健次郎先生の最終講義が看護学科棟大講義室において行われました。



当日は、一般教育 山内教授、臨床医学、笹島教授、それぞれの司会のもと、谷本教授は「磁気共鳴と共に40年」、菊池教授は「旭川医科大学での十四年間を願みて」と題して旭川医科大学を振り返りながらの有意義な最終講義をしていただきました。

最後には、学生の代表や病院、教室の関係者の皆さんより沢山の花束が届けられ、とても盛大な最終講義となりました。谷本先生、菊池先生、お疲れ様でした。そして、本当にありがとうございました。

## 外国人留学生冬季交流事業

平成18年度外国人留学生冬季交流事業が、2月2日(金)・3日(土)の両日にわたり本学に留学している学生とその家族と関係事務職員及び本学に研究者として在籍する外国人の計20人が参加し実施しました。

この事業は、北海道の冬のスポーツであるスキーを通して雪や寒さの中での楽しみを知ってもらうとともに、留学生同士や留学生と教職員との交流を目的に7回目の実施となりました。

今回、参加頂いた外国人の方々の国籍は、中国・韓国・台湾・ブラジル・カメルーン・エジプト・ドイツ・オーストラリア・イギリスの9カ国にわたり、国際色豊かな交流事業となりました。



天候に恵まれた富良野スキー場でのスキーは、北の峰ゾーンと富良野ゾーンのどちらも滑走するハイレベルの方から、生まれて初めてスキーをする方などとレベルは様々でしたが、全員が最後まで元気に楽しむことができました。

夜は白金温泉の宿泊施設で交流会を実施し、終始和やかな雰囲気の中で留学生と研究者・事務職員との情報・意見交換が行われました。

(学生支援課)

# 音楽系クラブコンサート

平成18年12月20日(水)夜7時より本学学生団体である室内合奏団によりますクリスマス・コンサートが病院玄関ロビーにて開催されました。

当日は、メンバーによりますサンタクロースやトナカイのコスプレ?での演奏に詰掛けた入院中の患者様、お見舞いの方々、近隣より来られた方々もクリスマス・イブ×5を楽しんでおられました。また、演奏の途中には来場したお子さんを中心にクリスマス・プレゼントも配られ大盛況のうちに終了しました。



室内合奏団  
クリスマスコンサート



残念なのは、23日(土)に開催予定であったプラスアンサンブル及び合唱部のクリスマス・コンサートがノロ・ウィルスの関係により中止になってしまったことです。

部員たちが開催を目指して一ヶ月以上の間、昼夜を問わず一生懸命に練習をしていたと考えますと本当に残念でなりません。特に最終学年の部員たちには最後のコンサートの機会が無くなってしまい掛ける言葉もないくらいでした。

後を引き継ぐ部員たちには、今後開催するコンサートに練習の成果をぶつけてもらいたいと願っています。



平成19年1月20日(土)夜7時より本学学生団体であるギター部によりますニュー・イヤー・コンサートが病院玄関ロビーにて開催されました。

試験の前の貴重な時期に日頃の練習の成果を発揮する機会に恵まれ思いっきり弾けて?いたように感じました。全13曲の演奏には来場された方々より声援が飛んだり時には笑いがあったりと和やかなコンサートとなりました。特に終盤の4曲はクラブ内バンドであります"Sound cab"による演奏で大変な盛り上がりとなったことをお伝えします。

もし機会がありましたら、大学関係者の方々にも本学の音楽系団体のコンサートに足を運んで日頃の練習の成果を耳と目で感じていただきたいと思いました。



ギター部  
ニューイヤー コンサート



# 平成18年度 1年のあゆみ

## 入学式4月7日(金)



医学科入学者 90名  
 看護学科入学者 60名  
 看護学科3年次編入学者 10名



## 新入生合同研修会 4月18日(月), 19日(火)

手話の演習



講演風景



BLS+AED

## 第32回医大祭 6月9日(金), 10日(土), 11日(日)



古本市



模擬店



フリーマーケット



ゲーム



受付風景

## 第53回北海道地区大学体育大会 (分担種目 弓道) 7月8日(土), 9日(日)



開会式



表彰式



競技風景



競技風景

# 平成18年度 1年のあゆみ

音楽の夕べ  
8月26日(土)



室内合奏団



合唱部



ギター部



ブラスアンサンブル

体育大会 8月30日(水)



解剖体慰霊式 9月20日(水)



外国人留学生  
秋季交流事業  
9月28日(木)



医学科第2年次後期  
編入学生入学式  
10月2日(月)



学位授与式 3月23日(金)

## 各種保険について

本学が薦めている保険の概要は、下記の図のとおりです。

③ 学生・生徒総合保険 A・Bタイプ ※3階部分	
内容	傷害・損害賠償を24時間補償&針刺し事故を補償
補償金額	死亡補償金 Aタイプ 500万円 Bタイプ 300万円 対人賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 対物賠償 Aタイプ・Bタイプ 1億円限度 針刺し事故の予防・治療費補償 保険期間中50万円限度
掛金	学生生活のしおりを参照してください。
加入の是非	看護学科/医学科第1～4学年 任意加入 医学科5・6学年 加入を義務付けている(臨床実習のため) ※学生教育研究災害傷害保険及び医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)に加入していること。
② 医学生教育研究賠償責任保険(医学賠) ※2階部分	
内容	正課中、学校行事中、通学中に、他人にケガをさせたり、他人の財物を壊したことにより被る法律上の損害賠償を補償
補償金額	対人賠償 1事故1名1億円限度 対物賠償 1事故250万円限度
掛金	6年間 4,800円 4年間 3,200円※1年間800円
加入の是非	入学時加入を義務付けている ※学生教育研究災害傷害保険に加入していること
① 学生教育研究災害傷害保険(学研災) ※1階部分	
内容	正課中、課外活動中、通学中及び学校行事中に本人が傷害等の事故にあった場合
補償金額	死亡補償金 正課中 2,000万円 課外活動中 1,000万円 傷害補償金 正課中 治療日数4日以上から 課外活動中 治療日数14日以上から 入院 1日 4,000円
掛金	6年間 5,400円 4年間 3,900円
加入の是非	入学時加入を義務付けている

詳細については、学生支援課学生生活支援係にお尋ね願います。

本学では、学生諸君の学生生活及び日常生活に対して上図のような保険を用意して、加入を薦めております。

①学生教育研究災害障害保険(学研災)は、学生生活中に負った本人の傷害等の保険です。加入を義務付けております。

②医学生教育研究賠償責任保険(医学賠)は、学生生活中に他人から損害賠償を求められた場合の賠償補償保険です。加入を義務付けております。

③学生・生徒総合保険A・Bタイプは、日常生活24時間をカバーする傷害保険と賠償補償保険です。

加入は任意ですが、医学科5・6学年は臨床実習に備え加入を義務付けております。

## 平成19年度日本学生支援機構 奨学生の募集について

日本学生支援機構は、優秀な学生で経済的な理由で就学困難な者に学資を貸与しています。

本学では、日本学生支援機構からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本学生支援機構へ推薦します。ただし、日本学生支援機構では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

申し込み方法はインターネット(スカラネット)による申し込みです。学生募集要項及び申し込み方法の説明会を4月11日(水)午後5時30分から第7講義室において実施します。希望者は集合してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、学生支援課学生生活支援係に相談してください。

## 平成19年度 前期分授業料免除 及び延納・分納について

平成19年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、免除基準のいずれかに該当すると思われる者は、学生支援課学生生活支援係から必要書類を受け取り、申請期間内に提出してください。

免除基準の概要はつぎのとおりです。

○経済的理由で授業料納入が困難であり、かつ学力優秀と認められる場合

○授業料納期前6か月以内において学資負担者が死亡、又は風水害等の災害を受け、授業料納付が著しく困難であると認められる場合

なお、このことについては、公用掲示板にも掲示してありますので確認してください。

また、不明な点は、学生支援課学生生活支援係にお問い合わせ願います。

申請期間 在学生 平成19年3月30日(金)

(期限厳守) 新入生 平成19年4月11日(水)

※授業料滞納者の授業料免除申請は、受理できませんのでご注意ください。

## 授業料未納による除籍について

授業料を2期滞納し所定の期日までに納入されない場合には、除籍となります。

この取扱いは、平成17年度から適用されていますので、平成19年4月1日において授業料を2期以上滞納している場合、平成19年9月30日をもって除籍

となります。

以後授業料納期である6か月ごとに適用されますので、授業料の支払計画をきちんと立てるようご留意ください。

(学生支援課)

## 新入生歓迎合宿のご案内

### 新入生歓迎実行委員会

皆さんご入学おめでとうございます。我々、新歓委員は右も左もわからないであろう新入生の皆さんのために新入生歓迎合宿というものを用意しています。日程としては、入学式の翌日からなので4月7日(土)、8日(日)に行います。気になる内容についてなんですが、まず、学内では大学見学、部活紹介、出店といった行事があります。ひとつずつ補足していきますと、大学見学では一年生で使う教室などを私たちが案内します。部活紹介はその名の通り数多くある部活が皆さんを勧誘しようと趣向をこらした部の発表をしてくれます。出店というのは部活などに自分のメールアドレスを教えたりする感じですね。そこで沢山の部活に書いておくと後々いいことがあるかもしれませんよ?? 続いて、ホテル「とき

や亭」に場所を移動します。そこでは、みんなで食事したり盛り上がりすぎたりと新入生同士の距離がぐっと縮まること請け合いです。また、大学よりもさらに積極的な「乱入」という部活勧誘があるので気になる部活にはどどん顔を出してみてください。

ここで書いただけではどんな行事かまだつかめないということも多いでしょうが、この新歓合宿に参加したことがきっかけで仲の良い友達を見つけたり、自分にあった部活を決めたりした先輩も沢山いるようです。参加して後悔させることのないように我々新歓委員は入念に準備をしてきました。ぜひ参加して旭川医科大学での生活を楽しいものにしてください!!



## 学生団体の「継続届」「設立届」の提出について

平成19年4月以降に学生団体活動（部活）を継続する団体の責任者は、4月中に「学生団体継続届」を学生支援課課外活動係に提出して下さい。なお、継続届を提出しない団体は活動を停止したと判断し廃部とします。

また、新規に学生団体の設立を希望する学生は

4月中に学生支援課課外活動係に「学生団体設立届」を提出して下さい。なお、設立届の提出時に活動内容等に関する説明を求める場合がありますので「活動内容が同じ様な団体がある」等、安易な団体設立は避けて下さい。各届出用紙は学生支援課にあります。

## 課外活動物品の返却について

学生支援課課外活動係です。最近、課外活動物品を貸出期間が過ぎても返却してくれないケースが多々見受けられます。心当たりの方は至急、返却して下さい。なお、貸出期間の延長は可能な

で貸出延長の手続を管理室（福利厚生棟の理髪室の隣）にて行って下さい。（特に昨年春当りに借りたままの君！一度管理室へいらしゃい！）



### 捏造問題

この拙文が皆さんの目に留まる頃にはいささか旧聞に属すると思われませんが、ある番組で放送した「納豆ダイエット」が捏造である事が明らかになって大騒ぎになりました。皆様の中にも実践した人がいらっしゃるのではないのでしょうか？これを機に捏造問題が随分と新聞その他を騒がしております。テレビ番組の捏造問題はこの番組に限らず他の番組でも明らかになってきており、まさに止まる所を知らないという様相です。ただ、もともとテレビなどは細○数○氏とか○原○之氏とか怪しげな番組を平然と流しているような媒体ですから、今回の事件もさもありなんとも言えるわけで、評論家の発する「消費者も賢くならねば」というありふれた結論とともに忘れられて行くでしょう。

一方、私たちの自然科学の分野でも捏造が後を絶ちません。ヒトES細胞の論文捏造事件は記憶に新しいところでしょうし、古くは一骨学実習の手引きをお読みになった事がある人はご記憶にあると思いますが一人類学の分野で前世紀に「ビルトダウン人」という大掛かりな捏造事件がありましたので、むしろ自然科学の分野こそ捏造の元祖といってもいいのかもしれませんが。ビルトダウン人の頃は捏造する側も力がこもっていましたが、最近ではコンピュータの発達により容易にできるようになりました。昨今の捏造増加の一因としてこの点は見逃せません。実際に研究で画像処理などをしていっていると、果たしてこれは捏造ではないのか？と疑問に思う事もあります。コンピュータに限らず最新技術を検証不十分なまま盲目的に使用する事により、私たちは知らないうちに捏造をしているかもしれません。

何百年も後に今の時代を科学史家は、膨大な捏造データの中にほんの少しの真実が混ざっている異常な時代と認識するかもしれません。その時にせめて「あいつのデータは現在では正しくないが、少なくとも故意に捏造したのではなさそうだ」と言われるように誠実に研究を行いたいものです。